

I 解題

これは、次に解説する「桜」とともに、山田流のみならず生田流でも、手ほどきの最初に習う曲となっている。この「姫松」と「若竹」の元歌は、「をかぎきよろしゆをかぎきよろしゆをかぎきよろしゆをかぎきよろしゆをかぎきよろしゆ」という歌詞の「岡崎女郎衆」であって、これは寛文四（一六六四）年初刷板行の『糸竹初心集』（中村宗三著）（中村宗三著）に箏および三味線歌として記譜されている。この歌は当時の流行歌であったらしく、この歌が箏にもうつされ、一節切（標準一尺一寸一分、約三三・六センチメートルの竹製の縦笛 尺八の一種）にも編曲され、さらに各地の神社の神楽、獅子舞などの神事、芸能の囃子にも、このメロディーが取り入れられた。そして、現在の姫松（譜例1）が半音を含む陰旋法であるのに対して、『糸竹初心集』にある原曲（譜例2）は、半音を含まない陽旋法であったという事は面白い事である（この原曲は奈良学芸大教授の林謙三氏によって復原されたものである）。

なお、明治十二（一八七九）年十月、文部省直属の音楽研究・教育機関として音楽取調掛が設立され、その事業の一つとして俗曲改良がなされ、一部箏曲の歌詞の改作が行われた。「岡崎女郎衆」が「姫松・若竹」に改められたのはその結果なのである。

II 歌詞

箏 平調子 舌を舌越（D）、三絃 二上り 一を箏の舌に合わす。
あるいは、箏 低平調子 参を舌越（D）、三絃 三下り 一を箏の参に合わす。

☆ 姫松

ひめまつこまつ、姫まつこまつ、みどりのいろませ、春ごとに。

☆ 若竹
わか竹をだけ、若竹をだけ、操なたわめそ、うきふしに。

III 句 釈

- * 『姫松』「ひめこまつ」に同じ。小さい松。「姫」は、小さくて愛らし
い意を表す接頭語。
- * 『小松』小さい松。「小」は親しんで呼ぶ接頭語。
- * 『若竹』その年に生え出た竹。
- * 『をだけ』小竹。「小」（名詞に上接して）小さい、細かいの意を表す
接頭語。
- * 『操』かたく守って変えないところざし。
- * 『なたわめそ』『撓む』押されて曲がる。「な…そ」の形で禁止の意を
表わす。
- * 『うきふしに』憂き節に。つらいこと、悲しい事の折に。

IV 通 釈

☆ 姫松

松が年ごとに緑の色をましてのび栄えていく。そのように、男の子も女の子もすこやかに成人して立派な人になりなさい。

譜例1 姫松

譜例2 岡崎